

15. シラカシ群集

東端部を除く武蔵野台地から多摩丘陵，加住丘陵などの丘陵地をへて，山地下部の海拔400 m ぐらいまでを生育域とする群集である。東京都にはまとまった面積を持つものは皆無で，残存するものはいずれも断片的なものばかりである。

シラカシ群集は，林冠型としてはケヤキーシラカシ林，シラカシ林，モミーシラカシ（アラカシ）林の3つに大別される。この林冠型の違いに対応して組成の分化がみられ，ケヤキ亜群集，典型亜群集，モミ亜群集が認められる。植生図には群集レベルで図示してあるが，それらのうち丘陵脚部や段丘崖などに線状に残存するのがケヤキ亜群集，丘陵や山地の尾根筋，急斜面のものがモミ亜群集である。この2つの亜群集は断片的ながら都内の各地にみられるが，典型亜群集（シラカシ林）の良好な残存林分は極めて少なく，八王子別所などにわずかにみられるのみである。

16. シラカシ・ケヤキ屋敷林

武蔵野台地上の五日市街道，青梅街道，志木街道，甲州街道などの古い街道沿いには，ケヤキやシラカシを主とする屋敷林が多くみられる。これらの屋敷林は明らかに植栽起源のものであるが，長い時間の経過と共に自然生のシラカシ群集に非常に近い組成，構造を持つようになっていく。東京都にみられるシラカシ林やケヤキーシラカシ林には自然生のものか植栽起源のものか明らかでない林分も多いが，前述の街道沿いの屋敷林のように植栽起源であることが明らかなものだけをこの凡例で示した。

17. スダジイ・ヤブコウジ群集

スダジイ・ヤブコウジ群集は，都内では武蔵野台地東端部に生育域を持つが，残存するものはきわめて少なく，自然生のは武蔵野台地と沖積低地が接する段丘崖などにわずかに断片がみられるのみである。

一般に高木層（高さ18～20 m）にはスダジイが優占するほか，アカガシが高被度でみられる。亜高木層にはモチノキ，ヤブツバキ，シロダモなどが，低木層にはアオキ，ヤツデ，ヒサカキ，ネズモチなどが多い。草本層にはベニシダ，ジャノヒゲ，ヤブコウジ，キツタ，ビナンカズラなどが生育しているが，高木層が常緑広葉樹でうっ閉されるため，林床は暗く全般に植被率は低い。

都内に生育するスダジイ・ヤブコウジ群集の主なものは，植栽起源のものを含めると，自然教育園，明治神宮，池上本門寺，六義園などにみられるが，いずれも小面積なため，植生図に示されたのはごくわずかである。

18. タブーイノデ群集

タブーイノデ群集は海岸に面した沖積地や段丘斜面下部などの排水の良い適潤地に成立

する群集である。東京都に現存するタブーイノデ群集は、いずれも植栽起源のものであるが、植生高は15～20 mに達し、林冠にタブノキが優占する。亜高木層にはムクノキ、エノキなどの落葉広葉樹を混生するが、全般に植被率は低い。低木層は発達しており、アオキ、ヤツデ、ヤブツバキ、モッコク、トウネズミモチなどが多い。草本層は貧弱でベニシダ、ジャノヒゲ、キツタなどがわずかに生育するのみである。群集標徴種とされるイノデはほとんど出現しない。

この群集は浜離宮にかなりまとまった広がりが見られる。このほか、植生図には示されていないが、芝離宮庭園、後楽園、水元熊野神社に断片的なものが見られる。

19. ハンノキ群落

ハンノキ群落は、狭山丘陵の東京都貯水池林の沢筋や八王子市別所の長池付近（平坦で水分の豊富な立地）にわずかにみられる。

群落高は15～20 mに達する。高木層はハンノキのみからなることが多い。植被率は70～80%とあまり高くなく、亜高木層はさらに貧弱でこれを欠くこともある。低木層もあまり発達していないが、イボタノキ、フジ、ウワミズザクラなどがよくみられる。草本層はよく発達していることが多く、オニスゲ、オモダカ、チゴザサ、ヒメシダ、イボクサなど湿性立地を指標する多くの種が見られる。

20. 河辺ヤナギ低木群落

主に多摩川の中流域の氾らん原などに発達する低木から亜高木のヤナギ林群落をまとめてこの凡例で図示した。この地域でよくみられるヤナギとしては、イヌコリヤナギ、タチヤナギ、ネコヤナギなどがあげられる。

これらのヤナギ林は、多摩川の福生付近から秋川合流点付近までの間にまとまりのあるものが認められる。

Ⅶ ヤブツバキクラス域代償植生

21. コナラークヌギ群集

コナラークヌギ群集は、都区内西部から多摩地方にかけての台地上や多摩丘陵、加住丘陵をはじめとする丘陵地に広く分布するコナラとクヌギを主体とする二次林群落である。この群集は定期的な伐採や下刈り、落葉かきなどの強度の人為的干渉の下に維持されてきたためにその種組成や種の量的配分はかなり不均質であるが、クヌギ、スイカズラ、アマチャヅル、シオデ、エノキなどを標徴種、識別種として他の群落と識別される。

この群集は普通4つの階層から成っている。すなわち、高木層から亜高木層にかけてはコナラ、クヌギ、エゴノキ、ヤマザクラなどが多くみられる。低木層にはガマズミ、カマツカ、イヌツゲ、サワフタギなどが多くみられるが、植被率は管理の程度によって差異が

多い。低木層から草本層にかけてはアズマネザサが優占することが多い。草本層は植被率が高く、スイカズラ、アマチャヅル、ヘクソカズラ、オニドコロなどのつる植物やチヂミザサ、タチツボスミレ、ノガリヤスなどが高常在度で出現する。

この群集は主として関東ロームに由来する黒ボクに被われた適潤で肥沃な立地に生育する。東京都での主要な生育地は武蔵野台地と多摩丘陵、加住丘陵東半部などである。分布域の上限はふつう 海拔 200 m ぐらいであるが、沢筋では 300 m ぐらいにまで達することもある。しかし、この群集は都市化の進行と共に年々減少している。台地上では、まとまった広がりを示すものは、青梅市東部と武蔵村山市三ツ木地区一帯、清瀬市周辺などにみられるだけである。一方丘陵地でも、ここ 20 年来の大規模な宅地開発によって急速に蚕食化が進行している。

22. コナラーオニシバリ群集

西端部を除く都区内にみられるコナラ林は、イロハモミジ、イイギリ、タブノキ、サネカズラなどを有することや、コナラークヌギ群集、コナラークリ群集の標徴種、識別種群を欠くことなどからコナラーオニシバリ群集に同定された。

高木層から亜高木層にかけてはコナラ、イヌシデ、エゴノキ、イイギリなどの落葉広葉樹が優占するが、低木層にはアオキ、シロダモ、ヒサカキ、モチノキなどの常緑広葉樹が多い。このため林床は暗く、コナラークヌギ群集やコナラークリ群集などに高常在度でみられるサルトリイバラ、ノブドウ、ノガリヤス、ヘクソカズラなど好陽性の多くの種群を欠き、逆にベニシダ、ジャノヒゲ、サネカズラなど耐陰性の強い種群を多く含んでいる。

都内でのこの群集の主要な生育地は、明治神宮、自然教育園、板橋区高島平南方の崖線などである。

なお、東京都のコナラーオニシバリ群集は、関東地方の海岸付近に生育する本群集の中核部の植分で広くみられるカラスザンショウ、ハゼノキ、イヌビワなどをほとんど有していないことから、分布域の辺縁部にあるものといえよう。

このほか、都区内には、ムクノキ、エノキ、アカメガシワ、イヌシデなどの落葉樹が優占する二次林が分布するが、これらの群落は組成的に独自性が低く、単一の群落として識別しうるかどうかについては現段階では明らかでない。そこで、ここではこの群落の大部分が亜高木層以下に常緑樹を多く含むほか、低常在度ではあるが、アカメガシワ、カラスザンショウ、ハゼノキなどのコナラーオニシバリ群集の識別種をもっているため、植生図にはコナラーオニシバリ群集と一括して示した。

23. コナラークリ群集

都下多摩地方の丘陵から山地下部にかけて分布する落葉広葉二次林で、オトコヨウゾメ、アオハダ、リョウブ、ネジキ、モミ、ウリカエデ、ミヤマガマズミ、コアジサイなどを標

徴種、識別種とする群集である。

この群集は分布域の上方で接するミズナラークリ群集とともに主に薪炭林として利用されてきたもので、数十年に一度皆伐される以外はほとんど人為を受けることはない。このため一般的にはコナラークスギ群集よりも階層構造の発達した林分が多い。群落高は12～18 mで、高木層から亜高木層にかけてはコナラが優占するほか、クリ、リョウブ、アオハダ、ヤマザクラ、エゴノキ、ネジキ、アカシデ、ウリカエデなどが多くみられる。低木層にはヤマツツジ、ムラサキシキブ、コバノガマズミ、オトコヨウゾメ、クロモジ、ツクバネウツギなどが多い。また草本層にはチゴユリ、シュンラン、ナガバコウヤボウキ、ジャノヒゲなどがよくみられる。

この群集は、草花丘陵、狭山丘陵、加住丘陵西半部と山地下部の尾根筋を中心に分布している。分布域は100 mから700 mぐらいまでである。

24. イヌシデ群落

イヌシデ群落は、林冠にイヌシデが優占する落葉広葉樹二次林である。東京都で見出されるものは、亜高木層以下にシラカシ、アラカシなどをはじめとしたヤブツバキクラスの構成種が多数生育していることが多い。

この群落は、加住丘陵の誕生山城趾付近や武蔵野台地上の井の頭公園などにみられる程度である。このうち、井の頭公園のものの大半は林床が裸地化してしまっている。

25. ヤダケーメダケ群落

川沿いの土手や河岸など水分条件の良い所に成立する群落である。東京都内ではヤダケの優占する群落はほとんどみられず、大半はメダケの優占するものである。高さ3～4 mに達するメダケが密生するほか、オニドコロ、ノブドウ、アケビ、スイカズラなどのつる植物が低被度ながら高常在度でみられる。

都内ではこの群落の大規模なものはほとんど見当たらない。

26. アズマネザサーススキ群落

アズマネザサーススキ群落は、関東地方のヤブツバキクラス域の代表的な二次草原で、東京都でも同クラス域の古い耕作放棄畑や造成後放置された空地などに成立している。この群落は二次遷移の途中にある不安定な群落であるため、高さ2 m前後に達するススキとアズマネザサが高被度、高常在度でみられる以外は、生育立地や発達段階によって種組成や構成種の量的配分にかなりの差異がある。

この群集は定期的な刈り取りや火入れなどによって持続するが、放置されるとやがてアズマネザサの一斉群落となり、あるいはヌルデその他の陽生の木本植物が徐々に侵入し、次第にコナラ林などへ移行していく。

都内でのアズマネザサーススキ群落の分布をみると、多摩丘陵をはじめとする丘陵地の古い耕作放棄畑と造成後放置された空地などに生育するものが最大の面積を占めている。

27. ススキーチガヤ群落

ススキーチガヤ群落は、アズマネザサを欠きチガヤが優占することで特徴づけられる。この群落は空地や川の土手、水田の畔道など常に刈り取りや火入れの行なわれるような所によくみられるほか、造成後数年以上放置された埋立地にも生育している。

一般に群落高は低く 0.3 ~ 0.5 m ぐらいの植分が多い。ススキあるいはチガヤが優占するほかメドハギ、テリハノイバラ、キンエノコロ、ヘラオオバコ、ヨモギ、ツルボなどが多くみられる。

この群落は、都内でも先に述べたような所に数多くみられるが、いずれも小面積であったり、他の群落と複雑に入り組んだりしているため植生図に示されたものはごくわずかで、関東村跡地にまとまった広がりを示すにすぎない。

28. 路傍雑草群落

路傍や空地などには、ヨモギーユウガギク群集、イヌムギーカモジグサ群落、ハナウド群集、カナムグラアキノノゲシ群集、ドクダミーチヂミザサ群集などさまざまな雑草群落が生育している。植生図にはこれらを一括して図示してある。

この凡例には、さらに踏跡群落（オオバコ群落など）や埋立地の泥湿地などに生育するオオイヌタデオオクサキビ群落なども含めてある。

路傍雑草群落は荒川、多摩川の河川敷と東京湾の埋立地でまとまった広がりをみせている。

29. アカマツーヤマツツジ群集

アカマツーヤマツツジ群集は、アカマツを主とした二次林でアオハダ、ネジキ、リョウブ、オトコヨウゾメ、ミヤマガマズミなど、コナラークリ群集と共通の標徴種、識別種群と林冠に高被度に優占するアカマツとの結びつきによって識別される。分布域はコナラークリ群集とはほぼ同じで、海拔 120 m から 700 m ぐらいにまでみられる。

この群集は林冠にアカマツが例外なく優占する以外は、立地条件や人為の加わり方によって階層構造や構成種の量的配分にかなりの差異がみられる。大きくみると高木層のアカマツの下にコナラ、クリ、アカシデなどからなる亜高木層を持つものとそれらを持たないものに大別できる。低木層から草本層にかけての構成種は前述のコナラークリ群集と大変よく似ている。

東京都におけるアカマツーヤマツツジ群集は、狭山丘陵と加治丘陵でまとまった広がりをみせるほか、奥多摩湖周辺や秋川支流の小坂志川流域などの山地下部の尾根筋などにも

分布している。

Ⅶ 河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生（各クラス共通）

30. ヨシクラス

河川の河口付近や河辺、池沼の岸辺などの砂泥質の土壌を持った湿地にみられる群落である。この凡例にはヨシの優占するもの、カサスゲ、アゼスゲ、オニナルコスゲなどのスゲ類の優占するものや上層にヨシ、下層にスゲ類の優占するものなど、さまざまなタイプのもものが含まれている。

都内では、荒川放水路や新中川の河岸に広い面積を占めるほか、多摩川下流部の河岸にも生育している。河川以外では、村山貯水池（多摩湖）やその他の池沼の岸辺に小規模なものがみられる。

31. ツルヨシ群集など

多摩川の中上流部とそこに合流する秋川、浅川などの河辺に生育するツルヨシ群集をはじめとする冠水河辺草原は、この凡例にまとめて図示されている。

ツルヨシ群集は、群落高70～200cmに達し、発達した地下茎を持ったツルヨシが優占するほか、オオイヌタデ、アメリカセンダングサ、コセンダングサなどが低被度で混在する。生育立地は砂地～小礫地で、洪水のたびにしばしば冠水する不安定なところである。

都内では、前述の多摩川の羽村付近から青梅まで、北浅川の叶谷町から西寺方町付近、秋川の秋留付近などで優勢である。

32. オギ群集など

多摩川の拝島付近から是政橋付近までに広い生育域を持つオギ群集をはじめ、クサヨシーセリ群集、カワラノギク・マルバヤハズソウ群集など主として河川の中流部に生育する冠水河辺草原はまとめてこの凡例で図示されている。

オギ群集は河川中下流部の冠水河辺植生の中核をなす群集である。群落高は1.7～2.5mに達する。オギが優占するほかにはヤブガラシ、ツユクサ、ヨモギ、セイタカアワダチソウなどの路傍性の雑草が低被度で生育するのみである。生育立地は、中～下流部の砂質で保水性のある土壌の所である。

オギ群集に代表されるこの凡例の都内での広がり、多摩川の羽村付近から狛江まで、北浅川の叶谷町から多摩川合流点までなどで優勢である。

Ⅷ 植林地・耕作地植生（各クラス共通）

33. アカマツ植林

アカマツ林は都下多摩地方の台地や丘陵地、山地下部などで比較的多くみられるが、そ

の大半は二次林とみなされる。明らかに植栽起源とみなされる林は武蔵野台地西方の青梅市東部一帯と多摩丘陵南部にみられるのみである。これらの林の種組成は隣接する二次林群落のそれと大差ない。

34. クロマツ植林

クロマツ植林は、ふつう海岸砂丘地帯の防風林や防砂林として広くみられるものであるが、今日海岸砂丘のみられない東京都の沿岸では、埋立地などにごく稀にみられるのみである。内陸地域でも多摩丘陵や草花丘陵などでごくわずかにみられるのみである。組成的には隣接するアカマツやコナラの二次林と大差ない。

35. スギ・ヒノキ・サワラ植林

スギ・ヒノキ・サワラ植林のうち、スギ・ヒノキ植林は東京都西半の山地下半部を中心にきわめて大きな面積を占め、青梅林業として全国でも有数の林業地帯を形成している。丘陵地でも谷筋や脚部などの土地の良い所には、小面積ながら多数のスギ・ヒノキ植林地がみられる。

スギ・ヒノキ植林の林床の種組成や構造は立地、林種、林齢、施業などの違いによって異なるが、よく成林したものでは、立地が最も大きな限定要因となる。東京都のスギ・ヒノキ植林は海拔約300mを境に上下で林床の種組成に差異がみられる。すなわち、上部ではクロモジ、アカショウマ、ガクウツギ、ヤマブキなど冷温帯を中心に分布する植物を主体とする林床を持つ。一方、下部ではヤブコウジ、ヒサカキ、ヤブラン、シケシダ、アズマネザサなど暖温帯を中心に分布する植物を主体とした林床を持っている。

36. カラマツ植林

カラマツ植林は、奥多摩のブナクラス域からトウヒークケモモクラス域の尾根筋から山腹斜面上部によくみられる。特に御前山から月夜見山に至る尾根から斜面上部や石尾根、都県界尾根とその周辺などにかなりまとまった広がりを見せている。

カラマツ植林は林床植生の種組成によって2つのタイプに分けることができる。1つは林床にミヤマクマザサ、スズタケなどのササ類が優占し、草本植物が貧弱なものであり、他は林床にササ類が優占せず、モミジイチゴ、ウツギ、タガネソウ、アカショウマなど多くの低木や草本植物を有するものである。

東京都のカラマツ植林は、御前山など一部のものを除き、若い林が多いことや高海拔地に植えられることが多いために、大半が小径木からなるものである。

37. 落葉広葉樹植林

東京都に植栽されている落葉広葉樹の主なもの、ニセアカシア、クヌギ、サクラなどである。このうちニセアカシアは、丘陵地から山地にかけての採石地跡の緑化や治山、砂防植栽によく用いられている。また多摩川や浅川の一部の河川敷には、山地や丘陵の植栽林からの逸出によって成立したものと思われる林分がみられる。サクラ植林は、奥多摩湖畔にまとまったものがみられる。また、クヌギ植林は多摩丘陵などに小面積のものが散見されるが、植栽後時間を経たものが多く、隣接するコナラ・クヌギ群集などの二次林と組成的にほとんど差異がなくなっている。このため、丘陵地にみられるクヌギ植林は大半がコナラ・クヌギ群集に含めて図示してある。

38. 竹 林

東京都にみられる竹林はモウソウチク林とマダケ林である。

モウソウチク林は、多摩地方の丘陵、山地脚部や台地上の古くから開けた集落や人家の裏などに頻繁に見出されるが、一般に規模の小さい屋敷林的なものが多い。林冠は高さ10～12 mのモウソウチクが優占するが、ケヤキやエノキなどの大木が超出していることも多い。植林や二次林ほど人為が加えられることが少ないため、林床にはオニドコロ、ノブドウ、ヘクソカズラ、モミジイチゴ、コチヂミザサなど多くの林縁植物とともに、シラカシ、アラカシ、アオキ、シロダモ、キヅタなどの常緑広葉樹の構成種がよくみかけられる。

マダケ林はモウソウチク林ほどみられないが、中流部の多摩川河辺や北浅川河辺などにやゝまとまったものがみられる。これらは放置されたもので、高さ3～4 mのマダケが密生している。このため草本層は極めて貧弱である。

39. 落葉果樹園

東京都で栽培されている落葉果樹の主なもの、ナシ、クリ、ウメなどである。

ナシは多摩川中流部の沖積低地の砂質土壌の土地に多く栽培されている。特に稲城市の多摩川沿いにはナシ畑が密集している。

クリは武蔵野台地西北部や丘陵地帯によく栽培されている。小規模なものが多いが、秋留台には比較的まとまったものがみられる。

梅林は青梅市梅郷一帯にまとまった広がりをみせている。

40. 桑 園

東京都では今日クワの栽培はほとんど行なわれておらず、日野市の一部にやゝまとまったものがみられるが、他は極めて断片的なものばかりである。

41. 茶 畑

東京都の茶畑は、武蔵野台地西北部にまとまってみられる。これらは隣接する埼玉県狭山地方のものと一体となって、いわゆる狭山茶の生産地となっている。

42. 苗 圃

苗圃は比較的都心に近い武蔵野台地中部の小金井市、国分寺市、小平市、田無市、東大和市などのような住宅地と農地がモザイクをなしている地域に多くみられる。生産されている苗木は大半が庭木や緑化樹である。

43. 畑地雑草群落（シロザクラス）

耕作中の畑には、耕起、施肥、除草などの人為干渉がくり返されるために、そこには一年生植物を主とした特有な雑草群落が形成される。東京都の畑地雑草群落は本州に広く分布するニシキソウ・カラスビシャク群集に同定される。この凡例には、除草がよくなされていて雑草群落がほとんど見出しえない耕作畑も含めてある。

現在、東京都で耕作畑がまとまった広がりを示すのは、武蔵野台地西北部の金子台、秋留台や武蔵村山市周辺、清瀬市北部に限られ、他は台地や丘陵緩斜面に点在するのみである。いずれの地域でもその面積は年々減少の傾向にある。

44. 休耕畑地雑草群落

耕作が放棄された畑地に成立する雑草群落は、立地や耕作放棄後の年数などによってさまざまであるが、一般にメヒシバ、エノコログサ、ハルジオン、ヨモギ、ハキダメギク、ヒメムカシヨモギ、オオアレチノギクなどの植物によって構成され、それらの各々が優占種となる。この凡例はこれらをまとめたものである。

これらの群落は長時間安定して存在するものではなく、時間の経過とともにススキ・アズマネザサ群集などに移行し、やがて陽生低木が侵入するようになる。

休耕畑地雑草群落は、10年程前には多摩丘陵などで広い面積を占めていたが、現在はまとまったものがあまり見出しえない。かつてこの群落が成立していた所は、宅地化によって消失するか、放置されてススキ・アズマネザサ群集などに移行している。

45. 人工草地

東京都で今回図示されている人工草地は、ゴルフ場や飛行場、広いグラウンドなどの人工シバ草地が大半で、放草地はごくわずかである。

人工シバ草地のシバはほとんどがコウライシバである。ここに出現する雑草は施肥、除草、刈り込みなどの管理の程度によって異なるが、シロツメクサ、メヒシバ、アキメヒシバなどは量の差はあるがどのようなシバ草地にも出現している。管理が十分でないシバ草

地では前述の種の量が多くなるとともに、オオチドメ、ヤマヌカボ、ネジバナなどが多くみられるようになる。

東京都には大規模な人工シバ草地が多い。代表的なものとしては、狭山丘陵を除く各丘陵と武蔵野台地や荒川、江戸川、多摩川の河川敷に広がるゴルフ場と横田、立川基地跡、調布、羽田の飛行場のものがあげられる。

46. 水田雑草群落

水田には定期的な耕起、施肥、除草など畑と同じような人為干渉が加えられるが、さらに湛水、排水が繰り返されることや立地が畑よりも湿性であることなどから、特有の雑草群落が形成されている。

イネの生育期である夏季の水田には、コナギ、ウリカワ、オモダカ、ホタルイ、キカシグサなどを主な構成種とコナギーウリカワ群集が成立する。

一方、春の耕起直前の水田には、ノミノフスマ、スズメノテッポウ、セトガヤ、タネツケバナ、コオニタビラコ、カズノコグサなどを主な構成種とするケキツネノボタンーノミノフスマ群集（乾田）やタガラシースズメノテッポウ群集（湿田）が生育している。

東京都はもともと水田の立地が少ないことに加えて近年の都市化の進行によって、現在水田雑草群落がみられるのは、多摩川中流域（秋川、浅川などを含む）の低地に小規模にみられるのみとなっている。またかつて丘陵の沢筋に多くみられた谷津田も年々少なくなっている。

47. 休耕田雑草群落（タウコギクラス）

耕作が放棄された水田には、立地条件のちがいによっていろいろな草本植物群落が成立する。それらのうちの代表的なものがミゾソバ群集であるが、このほかアシボソ、コブナグサ、アキノウナギツカミ、ホウキギクなどの好窒素性の一年生草本もいち早く侵入し、それぞれが優占群落を形成する。

東京都では、水田が耕作放棄されても比較的早い時期に住宅用地などに転換されることが多いので、現在植生図上にまとまった広がりを示すものは極めて稀である。

48. ヨシ群落

代償植生としてのヨシ群落は、東京湾の埋立地の有明、大井地区に広い面積を占めている。

このヨシ群落は、埋立後10年程度放置された、土性が悪くて雨水が湛水するような所に成立している。草高2mに達するヨシが優占していることが多いが、ヒメガマが優占種となることもある。このほか、群落内にはオオクサキビ、エノコログサ、セイタカアワダチソウ、スギナなどがよくみられる。

49. 市街地

樹群の占める割合が50%未満の市街地や住宅地がこの凡例で示されている。東京低地と武蔵野台地の大半がすでに市街地化されており、現在では多摩丘陵をはじめとする諸丘陵で急速に市街地化が進行している。

50. 緑の多い住宅地

樹群の占める割合が50%以上の市街地、住宅地がこの凡例で図示されている。

緑の多い住宅地は、古くから開かれた青梅街道、五日市街道、甲州街道、志木街道沿いや、諸丘陵の脚部、崖線などに沿って帯状あるいは線状に広がりをみせている。このほか世田谷区、杉並区などにも多い。

51. 公園、墓地等

公園その他に植栽された樹群とともに、かつて森林であったが公園や墓地に造成によって林床植生が除去されて現在は樹群だけから成る残存樹群とがこの凡例で示されている。

東京都に比較的古くからある大きな樹群地としては、皇居周辺、新宿御苑、明治神宮外苑、井の頭公園、小金井公園、多摩霊園、小平霊園などがある。また近年では東京湾埋立地、立川基地跡などに大規模な公園が造成されている。

52. 工場地帯

東京都に多数立地する工場のうち、特に大規模な工場地帯をこの凡例で示した。大規模な工場地帯は、東京湾の埋立地とその後背地や日野市、府中市、武蔵村山市、昭島市、羽村町などに多い。

53. 造成地

多摩丘陵をはじめとする丘陵地にみられる大規模な宅地造成地や大学移転用地、東京湾で造成の続く埋立地などのように、人為的に作られた裸地またはそれに近いものがこの凡例で示されている。

現在造成地は東京湾岸の埋立地と多摩丘陵中部に集中している。

54. 広いコンクリート地

コンクリートやアスファルトによっておおわれた広い土地がこの凡例で示されている。羽田空港、調布飛行場、横田基地、旧立川基地などの滑走路と東京港の埠頭などの諸施設がその主なものである。

55. 開放水域

河川，湖沼，海などの水域のうち，植生をほとんど持たない所がこの凡例で示されている。東京都の広い開放水域は，東京湾を別にすると，奥多摩湖および多摩湖の人造湖と多摩川，荒川など河川の流水域である。